

道元禪師著作の真偽について

伊 藤 秀 憲

大久保道舟編『道元禪師全集』下巻には、上巻に収められた『正法眼蔵』を除く、禪師の著作が収められている。大久保氏は『全集』の例言で、「禪師の著作の中には、滅後その道徳を慕うて故意に著作をなし、書冊に仕立ててこれを真作に擬したものが多く存している」が、しかし『全集』では偽作と見なされているような「疑わしきものは一切採らないことにした」と述べている。ただし、長年にわたって真作として扱われたものは、一応これを真偽未了として末尾に小さな活字の二段組で附載されており、それらについては解題はない。筆者は、『全集』で、大久保氏も真偽未了とされる。「附載」のものとは勿論、「結集第四」に収められているものの中にも、禪師の著作とするに疑問が残るものが少なからずあると考える。本稿はそれらについて、『全集』の所載順に真偽を検討しようとするものである。

（本稿での道元禪師の著作の引用は、大久保道舟編『道元禪師全集』上・下巻〈筑摩書房〉により、『全集』上・下と略記し、禪師の伝記

資料の引用は、全て河村孝道編著『諸本対校永平開山道元禪師行狀建掇記』〈大修館書店〉により、頁数のみで出典箇所を示す。）

（一）吉祥山命名法語

A 南閩浮提大日本国越前国吉田郡志比莊傘松峯、從今日名吉祥山。

諸仏如来大功徳、諸吉祥中最無上、諸仏俱来入此処、是故此地最吉祥。

宝治二年十一月一日

（『全集』下・三九四頁）

『全集』では、原文は瑞長本（『全集』に天正本とあるが、『諸本対校永平開山道元禪師行狀建掇記』ではこれを瑞長本と呼称しており、以下これを用いる）『建掇記』及び『訂補建掇記図絵下』に収載されているとしているが、これは訂補本によっているのであって、瑞長本には右と同文の法語は収められていない。瑞長本では、寛元二年（一二四四）のところに、

B 同七月十八日、奉請和尚開堂說法、爾時和尚云、從今日

名此山吉祥山、号ニ寺大仏寺、則作レ頌云、諸仏如来大功徳、諸吉祥中最無上、諸仏俱来入此処、是故此地最吉祥。(四九一五〇頁)

とある。訂補本も寛元二年の項にこれとはほぼ同文があるのであるが、その後に、

上ノ四句ノ偈ハ、華嚴経夜摩天宮品ノ偈ノ例ヲ以テ、文字ヲ易ヘテ、自作シ唱ヘラル、直ノ経文ニハアラス、マタコノ時ニハ、傘松峯ト号シテ、吉祥山ノ号ニハ、宝治二年ニ初テ改メラル、額字ノ写シ、今、洛下道正庵ニアリ、ココニ記ス、(一四八頁)

とあって、Aを引くのである。そして、

八行ニ書セリ、コレ真筆ノ写シナリ、自今日トアレバ、昨日マデハ、傘松峯ナリ、ココハ記者ノ失考ナリ、(一四八頁)

とある。大久保氏は解題で、訂補本は「吉祥」について「上ノ四句ノ偈ハ、華嚴経夜摩天宮品ノ偈ノ例ヲ以テ、文字ヲ易ヘテ自作シテ唱ヘラル、直ノ経文ニハアラス」と述べているが、吉祥山の山名は経文に依拠するのではなく、宝慶寺所蔵の禅師の月見像賛に「越州吉田郡吉田祥山永平寺」とあることからも、永平寺が吉田郡にあった関係から吉田の祥山の意味で名づけられたのではないかとする『全集』下・五四三頁)。このように「吉祥山」の山名の成立には異論を唱えながらも、大久保氏は訂補本によっている。それは訂補本が道正庵に伝わる真筆の写しといわれるものによっていることから

道元禅師著作の真偽について(伊藤)

あろう。

ところで、大仏寺を「傘松峯」と号したという古い記録はなく、面山によって呼称されたものであろうと言われているから(『永平寺史』一一三頁)、Aが真筆の写しというのは疑わしい。ではBではどうか。文献的には「吉祥山」と称されるようになったのは「建長元年」以降との指摘もある(同一三頁)。寛元二年二月二十七日吉峯精舎での示衆である『正法眼蔵』の転法輪の巻では、禅師は自分のことを「大仏」と言っている(『全集』上・五四二頁)のであるから、新しい寺の号は既に決まっていたと言える。とすると、Bの真憑性も疑わしいということになる。しかし、「吉祥山」の号が文献に表われないというところが、即ち称しなかったということにはならないし、「大仏寺」と称することは既に決まっていたが、寛元二年七月十八日の開堂説法に当って、吉祥山大仏寺とすることを、正式に大衆に告げたと考えられることもできる。だが、これとても推測にすぎず、真作であるとは断定できない。

(二) 立春大吉文

南謨仏法僧宝大吉、立春大吉、一家祖師祖宗大吉、(中略)大吉、立春大吉。

大吉開山、永平大吉。道玄

寛元五丁未立春、大吉大吉。

(華押)

『全集』下・四〇六頁)

本文の真偽については、拙稿「『正法眼蔵』撰述示衆年代考」（『駒沢大学仏教学部研究紀要』第三九号、一九八一年三月）の「附記『立春大吉文』真偽考」で論じたから、結論のみを記すことにする。

「寛元五年丁未立春、大吉大吉」とあることから、寛元五年の立春に本文は書かれたとされているが、寛元五年には立春がなかったのであるから、そのことを知らない後世の者による偽作であると言えよう。

（三） 贊

一花五葉開、一葉一如來、

弘誓是深海、回向運善財。

仁治壬寅歲九月初一日

沙門道元贊

（『全集』下・四〇八頁）

この贊は、一般に『一葉觀音贊』と言われており、禪師の自画自贊と称する一葉上の觀音の肖像及び贊が、古來版画として多く流行した。

ところで『全集』は瑞長本『建擲記』（四二―四三頁）に依っているが、一葉觀音については、瑞長本（三六―三七頁）では、嘉禎三年（一二三三）の記録として、『隨聞記』を引用した後でも触れている。『隨聞記』では、大恵禪師が尻に腫物ができ、死ぬかも知れないと言われても、一層坐禪に励んだ

ところ、腫物はうみつぶれ、何事もなかった話をあげ、病気というものは、気の持ちようで変わるものであるとし、その後、宋に渡った時の禪師自身の体験が述べられている。その箇所は『隨聞記』（『全集』下・四八九頁）と瑞長本『建擲記』を対照すると次のようである。

隨聞記

我モ當時ミ入宋ノ時キ、船中ニシテ痼病ヲセンニ、惡風出来テ船中サワギン時、

瑞長本 建擲記

吾昔時入宋時、船中ニテ痼病ヲヤミシ時、俄ニ惡風吹來船中ノ動搖不尋常、人々皆ナ膽ヲ消シ、今ヲ限ト斗云テ、手ト手ヲ取合テアリシニ、愚僧一心ニ觀音經ヲ讀ム、入於大海、假使黑風（中略）以是因緣、名觀世音ト、頻ニ奉レ念シ時、風雨漸ク穏ヤカニ成シ、其時膽ヲケシテヨリ我カ痼病平腹ス、是ヲ以テ思ニ、學道勤學シテ、他事ヲ忘却セハ、自ラ病モ起ル間敷カト覺ト云々、

今推量スルニ、一葉ノ觀音ハ此時出現シ給ウカ、但シ本記錄ナシ、

ここで瑞長本が『隨聞記』を引いているのは、嘉禎三年の記録としてであり、禪師の説示は、力を尽して仏道を学び、他のことも忘れてしまうと、病氣もおこらないということを

言わんとしている。

ところで瑞長本では、この次に、「又随聞記云」として、巻一の巻頭の「示ニ云、ハツベクンバ明眼ノ人ヲハツベシ」(『全集』下・四一九頁)で始まる一段を、全文ほぼ正確に引用するのであるが、この暴風の折に『観音経』を誦したことによって風雨が穏やかになったという箇所のみは、現存する『随聞記』にはない。これは著者の建掣が見た『随聞記』がそのようなものであったのか、或いは、『随聞記』の引用文中に、宋に渡った折の話が挿入されたのであろう。この『随聞記』の記述と、当時禅師の作として伝わっていた『一葉観音賛』とが結びつき、「今推量スルニ、一葉ノ観音ハ此時出現シ給ウカ、但シ本記録ナシ」と、記録はないが、この暴風の時に出現したのであろうかという推測に至ったものと考えられる。

明州本・門子本・元文本『建掣記』も、語句の多少の違いはあるが、引用する『随聞記』の内容は瑞長本に同じである。ところが、瑞長本では建掣が推測している箇所が、門子本では「此船中ニテ一葉ノ観音ハ出現シ、但無本記録云」と、記録にはないがこの船中に一葉観音が出現したということになり、明州本・元文本では「此中一葉観音出現」という史実として記されている。

延宝本・訂補本『建掣記』では、この『随聞記』の引用は

道元禅師著作の真偽について(伊藤)

なく、瑞長本が、

安貞元年^丁八月己^ニ帰朝シ給、二十八歳辰也、九州肥後国求麻之^{マツノ}庄之中、河尻之大渡ト云処ニ居住アリ、(三三頁)

と、帰国の事実のみを記すところに、延宝本(一六八〇年書写)では、『日域曹洞列祖行業記』(以下『列祖行業記』と略す。

一六七三年刊)の「初祖道元禅師伝」(一二二頁)より、招宝七郎大権修理菩薩が正法を護るために、三寸ばかりの白蛇となつて鉢囊の中に入つた話と、

亦海風俄惡、波濤怒怒鼓、一船無^ニ人色、師誦^ニ普門品、忽^ニ補陀大士乘^ニ蓮葉^ニ泛^ニ海上、師自図^ニ其像、系^ニ賛于其上^ニ而梓^ニ之、世号^ニ一葉^ニ観音、少頃風波恬如也、以^レ故孤帆無恙、速着^ニ肥之後州河

尻、^{ノ事}実安貞元年^丁年也、河尼大渡ト云処居住、(三三頁)

と、帰国時に暴風にあつた話を挿入している。そこでは、普門品(『観音経』)を誦すと蓮葉に乗った補陀大士(傍注に「観世音菩薩ノ事」とあり)が現われて、それを禅師が書き賛を系ぎ、更にそれを版に彫つたとするのである。やがて風波はおさまるのであるが、自画自賛だけでなく、版を彫つたということまで加わるのは、当時流布していた「一葉観音像賛」の版画の影響によるのであろうが、延宝本はこの賛を載せない。一方、訂補本も帰国時の話として、次のように記している。

コノ冬、支那ヨリ船ヲ発シテ、船中ニ黒風ニ値フ時、師船上ニ黙

坐シケレバ、忽觀音大士、蓮葉ニ乗ジテ海面ニ泛デ、風波穩ナリ、乃日本ノ安貞元年ニ當テ、肥後ノ川尻ニ著岸ス、一葉ノ觀音ハ、ソノ影ヲ写セルナリ、（三三頁）

訂補本では『觀音經』は誦さず、「默坐」すると觀音大士が現われ、風波は穩やかとなるのである。そして、一葉觀音はその姿を写したものである。

訂補本には、更に「補」の部分があり、次のように記している。

肥後州河尻津、有寺号南溟山觀音寺、本尊於一葉觀音、寺僧伝謂永平祖師歸朝值惡風於南溟、時默禱船上、則忽見大悲尊乘蓮一葉而浮海上、風波恬如、及得著岸、自刻其所觀而安于此、以故有南溟觀音之号、其後監院僧、画其像謁祖師於洛南、乞贊、便題云、一花五葉開、一葉一如來、弘誓深如海、回回運善財、監院彫版、其版現今藏寺傍之民家云、（一四四頁）

これによれば、河尻津にある南溟山觀音寺の本尊は、道元禪師が帰国の折に暴風に遭い、船上に默禱した時現われた蓮一葉に乗った大悲尊を、自ら刻ったものであるとし、その後この寺の監院の僧がその像を画き、禪師が贊を付け、それを監院が版に彫ったとする。それが当時流布していた「一葉觀音像贊」の版画ということになるのであろう。訂補本では「贊」のみが道元禪師の作とするのである。

『一葉觀音贊』は、瑞長本（四二—四三頁）・明州本・元文

本（一〇二頁）が仁治三年（一二四二）九月一日のものとし、それを否定する資料はないが、渡宋の折に暴風に遭い、一心に『觀音經』を誦したところ、風雨が穩やかになったという部分を含む（増稿されたものであるのかも知れないが）『隨聞記』の話と、『一葉觀音贊』が建擲によって結び付けて考えられ、始めは推測であつたものが、いつのまにか史実となり、帰國時の話となり、禪師自らが葉觀音像を刻るなどに変化していったと言えよう。『一葉觀音贊』そのものは偽作とは断定できないが、この一葉觀音に関する話は、建擲の推測から始まっているのであつて、史実ではない。

（四）答近衛某法語

仁治三年壬寅四月十二日、近衛殿謁法談次問、我朝先代此宗伝來也否。師答云、我朝名相仏法伝來、伝聞仏法名相以來、僅四百余歲也。而今仏心宗流通正當這時節、神丹國後漢明帝永平年中始伝名相仏法、以後至于梁朝普通八年、検時代僅四百余年也、當其時始流通西來直指之祖道、自爾以來六代、曹谿・青原・南嶽下分吾宗云云。（後略）（『全集』下・五一—四頁）

近衛殿が誰であるかは不祥であるが、我が国の先代にこの宗が伝來したのかという彼の問題に、禪師は、名相の仏法が日本に伝わってから四百余年にして、自分が將來した「仏心宗」が流通することとなったが、中国においても、後漢の明帝の永平年中に名相の仏法が伝わってから四百余年後に、達

摩によって始めて「西来直指の祖道」が流通したこと等を答えている。この答の傍線部分、即ち永平年中に伝ったのは名相の仏法であつて、達摩によって本当の仏法が伝わったという主張は、次のように『正法眼蔵』の中に見ることができ

る。
後漢の孝明皇帝永平年中よりこのかた、西天より東地に来到する僧侶、くびすをつぎてたえず。(中略)ただいたづらに論師および三蔵の学者に習学せる名相のみなり、仏法の正嫡をきかず。

(伝衣 『全集』上・二八八—二八九頁)

すなはち梁代の普通八年丁未歲九月二十一日なり。(中略)祖師西来せずば、東地の衆生、いかにしてか仏正法を見聞せむ。いたづらに名相の沙石にわづらふのみならん。(行持下『全集』上・

一四〇—一四一頁)

確に禪師の答は『正法眼蔵』に見られる主張と一致している。だが、「仏心宗」とあるのはどうであらうか。なぜならば、禪師は仏道の巻で、

およそ世尊在世、かつて仏宗と称しましませう。靈山宗と称せず、祇園宗といはず。我心宗といはず、仏心宗といはず。いづれの仏語にか仏心宗と称する。いまの人、なにをもてか仏心宗と称する。世尊なにのゆゑにか、あなたがちに心を宗と称せん。宗なによりてか、かならずしも心ならん。もし仏心宗あらば、仏身宗あるべし、仏眼宗あるべし、仏耳宗あるべし、仏鼻舌等宗あるべし。仏髓宗・仏骨宗・仏脚宗・仏国宗等あるべし。いまこれな

道元禪師著作の真偽について(伊藤)

し。しるべし、仏心宗の称は偽称なりといふこと。『全集』上・三八六頁)

と、宗称を批判する中で、「仏心宗」と称することを徹底的に批判し、「仏心宗の称は偽称なり」とまで言っているからである。そのような禪師が、自ら伝えた正伝の仏法を、「仏心宗」と称するであらうか。近衛殿に対する禪師の答は、禪師にふさわしいものではあるが、禪師が使用するはずのない「仏心宗」の一語によって、偽作であることを露呈したと言えよう。

(四) 紫衣辞退偈

永平雖^ニ山淺、勅命重重重、
卻被^ニ猿鶴笑、紫衣一老翁。

(『全集』下・五一五頁)

この偈が記載されているのは、『建誓記』では瑞長本・延宝本・訂補本である。

先ず延宝本であるが、これも『列祖行業記』の「初祖道元禪師伝」を受けて書き込まれたものと思われる。対照して示せば次のようである。

列祖行業記

寛元帝、^{後醍醐}院也、聽^ニ師道^三譽、錫^ニ紫^四方袍^五仏法、^{上人号也、是時本朝未^ニ有^一禪師之号、}之号、
師再三力辞不^レ許、謝^ニ叡恩、獻^ニ偈曰、(偈略)上嘉歎久之、

(二七一頁)

延宝本 建誓記

一、寛元年中、後嵯峨院聽^ニ師道^三譽、錫^ニ紫^四方袍^五仏法之号、^{上人号也、是時本朝未^ニ有^一禪師之号也、}
師再三力辞不^レ許、謝^ニ叡恩、獻^ニ偈云、(偈略)上嘉歎久之、云云、

(六〇頁)

『列祖行業記』は更にその前の『永平開山道元和尚行録』（一六七三年刊、撰述はこれより以前）によっていると思われるが、延宝本がよったのは『列祖行業記』の方である。

瑞長本には、

内裡ヨリ、紫衣ヲ永平寺ニ贈賜時、道元謝頌云、

吉祥山雖賤、勅命重ム、還被猿鶴、紫衣一老翁。（一三七頁）

とあるが、天正一七年（一五八九）に瑞長が書写したという識語の後にあることから、元の『建擲記』にはなかったと考えられてよいであろう。

訂補本（一七五四年刊）には、

マタ後瑳峨院、聞ニ師道嘗、賜紫衣、再三辭亦不許、受之不用、
作_レ偈上謝スルニ云ク、（七五頁）

として次に偈を掲げ、「補」として次のように述べている。

コノ記ニ勅号ノ事ナシ、近世撰ノ伝ニ、仏法禪師ノ号ヲ賜フトアルハ誤ナリ、深艸ニ在住ノ時ヨリ、仏法上人ト称ス、仏法ハ祖師ノ房号ナリ、（一五一頁）

ここで注意しなければならないのは、「近世撰ノ伝ニ、仏法禪師ノ号ヲ賜フトアルハ誤ナリ」としている点である。面山は、古伝には禪師号を賜ったという記録がなく、近世撰の伝のみにあることに気付いていたのである。訂補本は禪師号に限ってそのように述べているが、紫衣についても言えるのではなからうか。訂補本がよった。『建擲記』にはこの偈を

含む記事があったとしても、この記事の正しいことにはならない。延宝本より七〇年余り後であるから、面山は加えられた系統の『建擲記』を見たと考えることができらるである。

以上のことから、『建擲記』には元來紫衣や禪師号に関する記事や偈はなかったと言える。それ以前の古伝には勿論ない。紫衣や禪師号を再三辭退されたというのは、禪師にふさわしい話ではあるが、示寂後四百年余り経た一六七〇年代以降の諸伝に至ってあらわれるということは（瑞長本へ一五八九年書写）の書き入れが初めからのものとすれば三百年余り後となる）、後世になって作られたものと考えるべきであろう。

以上、道元禪師の著作と言われるものの五編について真偽を検討したが、その多くは偽作であり、真作と断定できるものはなかった。紙幅の関係からすべてについて述べることはできないが、この他にも偽作と思われるものがあるということを書いておく。

（一九八九・七・一九）

△キーワード▽ 吉祥山命名法語、立春大吉文、一葉觀音贊、答

近衛某法語、紫衣辭退偈

（駒沢大学助教授）